

就農事例

登 博基氏

調査日 令和 6 年11月（就農後 7 年目）

所在地 三豊市高瀬町

経営主 登 博基

主要事業 露地野菜

主要作目 レタス 340a
ブロッコリー 200a
キュウリ 16a
スイートコーン 60a
タマネギ 30a
ブドウ 5a

就農タイプ 新規就農（非農家出身）

就農時期 平成30年

労働力 家族 2 名（本人、妻）
常時雇用 2 名

ヒストリーあらすじ

・平成29年 登博基氏は非農家出身で県内でサラリーマンとして働いていたが、キャベツ経営をしている義父の影響を受け就農を決意。

・平成29年～平成30年 義父と観音寺市の農業法人の下で計 1 年間の研修を受け、平成30年 6 月就農。機械は親戚からレンタルや譲り受けをし、農地は農地機構を通じて借入れを行った。経営品目はレタス、ブロッコリー、スイートコーン等とし、経営面積約100aから経営を開始した。

・令和元年 生産物は J A への出荷を中心にしつつ、地域の加工業者へタマネギの出荷を行っており、地域との繋がりを大切にしている。

・令和 2 年 規模拡大に伴い、常時雇用を開始した。

・令和 5 年 労働力確保のため、外国人技能実習生を 2 名雇用した。

・令和 6 年 認定農業者に認定される。外国人技能実習生の実践的なスキル習得のため O J T を通じた人材育成に取り組んでいる。

エッセンス

● 計画的な機械整備

・機械は、親戚からレンタルしたり安く譲り受けたりすることにより、初期投資を抑えた。
・制度資金や施策を活用し、規模拡大や生産量に応じて、計画的に設備投資を行った。

● 農地確保

・借入れした農地を丁寧に管理することにより信頼を得ることができ、地域で農地の管理を依頼されることも増え、規模拡大につながった。

● 地域の交流

・ J A への出荷を中心とすることで地域との関係構築を図った。
・タマネギを地域の加工業者へ出荷することにより、地元で複数の販路を確保した。



登 博基 氏



新品目 ブドウ



育苗ハウス



キュウリの栽培状況



ブロッコリー収穫



ブロッコリー収穫

登 博基氏 ヒストリー＜課題と対応策＞

就農前	就農期 平成30年～	確立期 令和2年～	発展・将来構想 令和7年～
● 県内でサラリーマン ・ 義父がキャベツで一足先に就農しており、その姿を見る中で就農を決意 義父をみて、就農したいと思ったが、非農家のため研修を受けることとした。	● 平成30年に就農 ・ 香川県農地機構を利用して農地を約100a確保 ・ 研修先で学んだレタス、ブロッコリー、スイートコーン等で経営をスタート まとまった農地ではないが、自宅から比較的近い農地を香川県農地機構を通じて借り入れし、無理のない範囲で経営基盤を確保できた。	● 規模拡大 ・ 補助事業を活用し機械を導入 地域で農地貸借の声がかかってくるようになり、規模拡大が図れるようになったため、効率的に管理していくため補助事業を活用し機械を整備した。 ● 雇用を確保 ・ 規模拡大に伴い雇用を開始 初めは農業に興味がある知人を雇用したが、数年経過した頃に退職した。 労働力の維持が難しいと感じたため、令和5年から外国人技能実習生を受け入れた。 ● 新たな品目の導入 ・ ブドウを導入 ブドウは将来的に経営の柱にしたい思いがあったが、就農期に投資が難しかったため、数年経過したタイミングで新たに取組んだ。	● 所得の確保、農地の集積・集約化 ・ 安定的に出荷し、所得を確保 ・ 農地の集積・集約化 近年の異常気象により、栽培が難しくなっている中、同じ失敗は繰り返さない。 自宅近くで農地の集積・集約化を行い効率的な管理を行う。 ● 労働力の確保と育成 ・ 常時、技能実習生を確保 ・ 従業員の育成 労働力を確保するため外国人技能実習生を継続して受け入れる予定。 ゆくゆくは日本人を雇用し、人材育成を上手く行うことで右腕となる従業員に育て、安定経営をしていきたい。